

地球 第十四卷第二號

昭和五年八月一日

戰爭の地理學的考察（二〇）

小 川 琢 治

二九

信玄の信濃上野武藏の三州に對する北條氏との聯合軍としての進出は永祿十年（一五六七年）まで續き、同年九月謙信が厩橋城に來り關東を窺ふたのに對して、北條氏康父子と約して兩軍五萬五千人を以つて利根川を渡り、厩橋城下を燒き、大風に遇つて却つて苦んで引取り、謙信も亦た兵を收めたのがその最終の行動であつた。蓋し此の年信玄は長子義信を忌んで迫つて自殺せしめ、その妻今川氏眞の姉は駿河へ歸つたので、武田、今川兩家の手切れとなり、従つて北條氏とも斷交の結果を生じ、聯合して越後勢に當つた從來の行動も之と共に終り、翌十一年春には駿河關東より甲信上三州へ鹽留（食鹽輸入の禁止）により武田氏を苦しめんとするに至つた。

この鹽留の政策は内陸國に對する交戰國の執り得る手段として地理的意義はある。恰も世界戰爭に於ける聯合國が中歐の獨逸兩國に對して執つたのと趣を同くし、城郭の包圍を廣い地域に及ぼしたと言へばそれまでである。然れども是は民を弔ひ罪を伐つといふ王者の師に取らざる所であるの

みならず、左なきだに北條今川兩家の手におへぬ甲州勢を窮地に陥れて、死力を出して奮闘せしめる結果を來すべきを考へないのは實に解し難き愚策と言はねばならぬ。之に反して謙信が三州に鹽を入れることを申し出したのは好漢の快舉一陣の清風腋下に生ずるを覺えしめるに足る。

但し今川氏との手切れに先ち十年十一月勝頼の妻が信勝を生んで産後に病死した時、信長は信玄の女七歳になるのを信忠の室とせんと希望し、信玄も亦た四方に敵を受くるの不利を慮り、美濃の一面を味方とせんとして、この提案に應じた。のみならず一面には使を家康に遣つて、大井川を堺として駿遠を分割することを約し、互に誓紙を取換はした。又た十二年房州里見氏に好を通じ、翌年元龜元年には佐竹氏とも連盟を約して、北條氏の背後を脅かさんと試みた。

北條氏康はまた之と前後して謙信に和睦を申し込み、謙信は之を容れて七男三郎を養子とした。これは氏眞の舅たる氏康が甲駿の斷交を奇貨として駿河を手中に收めんとする意圖に出たものである。謙信はまた信濃に於いて武田氏と争ふを止めて上洛せんとして、和睦を信玄にも申し込んだのであるが、信玄が之に應ぜなんだといふ行ささつも此の間にあつたといふ。

然るに信玄は鹽留に對して直ちに最後通牒を發せずして、氏眞の信長に對する弔ひ合戰の時に加勢に都合がよいから、東三河を信玄に割讓せよとの要求を提出し、氏眞は信玄の織田氏との婚約を結んだことを責めて、初めて兩者の手切れとなつた。

此から信玄の南方に進出し、海道に沿ひ上洛せんとする末期の活動に入ることゝなつた。然るに永祿十一年十一月には信玄に胃癌の徵候が既に起つてゐたので、一日も早くその計畫を實現せんと

燥せり出したのである。

三〇

信玄の駿州進出は十二月にして、六月二萬餘人を以つて六日甲府を發し、下山道を経て七日目の十二日に富士川右岸（今の柴川驛の對岸）に在る内房に出た。内房は甲府から二十六里と稱し、興津と蒲原とに通ずる街道の分岐に近く、甲州から駿府を攻める地理上樞要の位置に當つてゐる。

氏眞はこの侵入軍に對して防戦せんとして、旗本を清見寺に備へ、先鋒を進めて薩陞峠を固めさせた。然るに戰鬪の開始せられんとするに當り、今川家諸將二十一人は戦はずして兵を收めて駿府に退き、氏眞も險に據つて防守する能はずして駿府に入つた。

甲州勢は山縣馬場小山田小幡眞田兄弟内藤の七將勢に乗じて江尻を越えて宇和原まで進入し、氏眞は駿府を固守する能はずして掛川城に退去し、十三日には甲州勢は駿府を燒き拂ふた。駿河勢の此の如く脆く一矢をも發せずして潰走したのは、氏眞の暗愚にして、三浦右衛門を寵用し、朝比奈兵衛の逆心を罰する能はざりし爲めに、人心離散して内通者が多かつた結果で、如何ともし難かつたのである。

此の時信玄は久能を見立て、城を設け今福淨閑をして之を守らせ、駿河の足溜とした。

氏康は翌十二年正月使を信玄に遣つて、氏眞の無分別により之を追ひ落されたのに對し、恨む所なしと言せ、信玄よりも返禮の使を遣つた。然るに氏康は使を押し籠めて置いて、十八日父子四萬五千の兵を以つて出動し、薩陞山から由比蒲原の海岸に續々と到着した。然れども信玄はこの甘言

に欺かれた譯ではなかつたから、山縣を西方の押へに残し、一萬八千の人数を一騎驅に馳せて興津に至り、薩陞山の切所を先づ占領して之に當つた。

この對陣四月三日まで九十三日に及び、信玄は奇計を用ゐ、山縣を呼び寄せて北條方の陣に夜襲して押し散らさせ、翌夜馬場山縣で再び襲ふて由井源藏の陣屋を破らせ、二十八日突然興津の北に續く庵原の山中を経て甲府に還つた。此の時は内房通りは北條方に取り切られてゐたから、その西手の山中にかゝつて富士川の上流に出たのである。この山間通路の行軍は原隼人の偵察によつたことになつてゐるが、大宮の側から北條勢が富士川右岸に渡つた場合に、内房通りの危険は豫期される所であるから、非常時にこの通路を取ることは出兵當初既定の方策であつた筈で、原隼人當面の任務は主としてその北條勢の襲撃し來るや否やを偵察するに在つたと想はれる。

信玄第一回の駿河出兵は今川氏眞に對しては完全にその目的を達した。氏眞は遠州掛川城に退いたが、徳川氏東進の壓迫を受けて支ふることが出来なくなつて、五月終に撤退して海上から小田原に渡り北條氏に依ることゝなつた。

之を要するにこの出兵は目標が駿府であつて、北條氏の側面の脅威を受けつゝあつたから、従つて富士川右岸に沿ひ之を利用して往復したのは巧に地勢を利用した作戦の妙を得たものである。

氏康は信玄退却後直ちに駿府に入り、蒲原大宮等の諸城に守兵を置いて小田原に歸つた。是は駿河を氏眞に渡さぬ意圖に出たのは勿論で、信玄退陣に當り内藤修理が氏康五萬の衆を以つて掛川に押し通り、徳川勢を追ひ拂ひ氏眞を駿河へ直さば、久能城の今福等をば如何になすべきかと危ぶん

だ時に、信玄は氏康にそんな今川氏に對する誠意がないものと見縊つたのは當つてゐた。

三一

同年六月十日信玄は甲府を發し、女坂柏坂の難所を通つて大宮通りを経て富士裾野に出て、韮山山中まで焼き拂ひ、十三日三島を燒いて沼津の狩野川河口の邊(川なり島)に陣を取つた。然るに此の夜突然洪水の津浪が起つて、甲州方は八幡大菩薩の旗を波に浚はれて北條方の手に渡つたといふ挿話があつた。然かしこの韮山方面への出兵は信玄の北條氏に對する陽動に過ぎぬもので、その眞意は相州小田原城を攻めて北條氏を威嚇して駿河から手を引かせんとする第一歩に過ぎなんだ。

されば八月廿四日二萬人を以つて相州に發向した。その通路は判然たらぬが、信州から餘路峠を越えて上野武藏を経て出たものゝ如く、北條の籠つた瀧山城を攻めて三の廓を攻め破り、郡内から出て八王子衆と二十里に戦つて之を一蹴した小山田兵衛尉の手と合して相模川を渡つた。

此の時その支隊は本郷江戸品川邊まで働きかけたが、太田富永遠山等の北條方の諸將は城に據つて取り合はず、甲州勢も亦た目標が小田原城にあつて、その周邊諸城に對しては威嚇を加へるのみで敢て決戦せんとは試みなんだ。

信玄の相模川渡河は甲州流兵法の戰術上の典型を示すもので、八王子から厚木街道にかゝつて、當麻から座間までの間で四手に分れて、左岸から西に向つて渡つた。而して先づ瀧山城その他の北條方諸城兵からの背面の襲撃に對する跡の押へとして、山縣小幡眞田の三手を置いて、川越の時の警固とし、先鋒の内藤小山田蘆田等勝頼と共に十一將は當麻から渡り、淺利原跡部の三將は二の手

で、磯部から渡り、飯尾長坂等の旗本、馬場等四手の旗本前備及び小荷駄奉行甘利衆は新戸から渡り、後備一條天尾等逍遙軒と共に六手は座間から渡つた。

此の一絲紊れざる甲州勢の行動に對して氏康は小田原城に籠つて動かなかつたから、直ちに小田原城に攻め寄せ、十月二日内藤修理等の先手は城下町を悉く焼き拂つたが、謙信の小田原攻めの時と同じく、固より永く包圍攻撃を試むることはない筈であるとして、氏康は客兵決死の奮闘を慮つて手を出さなかつた。信玄も亦た城下を荒らしただけで直ちに引き揚げて湯本風祭に陣取り、十月四日勝頼を殿將として小田原を引き取るや、再び踵を反して厚木の南の田村大神に陣取り、鶴ヶ岡八幡宮へ參詣と言ひ觸らしつゝ、五日三増峠にかゝつて退却した。

此の行動を細看するに、湯本に陣取つたのは、敵城の多く通過に困難なるに山路なるに拘らず、箱根を越えて三島に出んとする如く装つたもので、東に向つて相模川右岸に引き返さんとする行動を眩ました巧妙なる戰略的操兵法であつた。鶴ヶ岡八幡宮參詣の爲めに再び渡河するといふ宣傳も亦た北條勢をしてその道筋に人數を配らせて、三増峠の街道の警備を怠らせて、退路を自由にせんとする手段で、是れも亦た適中した。蓋し甲州軍の燎原の勢で武相を横行する出鼻の銳氣を避けて、その退却を追躡して功を桑榆に收めんとするは、飽くまで隱忍堅實なる氏康一流の戰略であるから信玄の退き口に對する深慮は主としてその意表に出るに在つたものと察せられる。

十月六日三増峠合戦は前に既に述べたこともあるが、尙ほ茲にその經過を略記すれば、甲州勢は謙信小田原攻め退き口に小荷駄を掠取された失敗に鑑みて備を立てたもので、驍將内藤修理を小荷

駄奉行として小幡尾張を津久井城の押へとして、先づ發して三増峠を越えて津久井城下を通過せしめ、淺利式部馬場美濃守勝頼の三備を會釋勢として殿戦せしむることとし、山縣三郎兵衛を頭とした八備を遊軍廻備とし、旗本組その他は左右後五備宛として峠を左にして、北條上總を大將とした北條家諸城主の追撃軍に對した。この諸勢は三増峠を切取つてゐたのが甲州勢の三増に陣取つた時には皆な中津川を渡つて半原山へ引上て陣取つて之に對した。信玄は典厩信豊を守旗役として内藤修理奉行の小荷駄が無事に城下を通過し、遊軍の適當の位置に就くを見定めて、信號旗を振つて通報する任務を執らしめた。

此の時信玄が氏康父子の旗先を見ねば戦を始めぬと颯言したので、北條上總は早馬二騎を跡に歸して、その出陣を促した。信玄之を望み父子の來ぬ前に開始せんと燥り、典厩の合圖を見て馬場信房先づ返して戦ひ、遊軍は後より懸り、北條家の備の間に切所があつて互に助け合へぬに乗じて總攻撃を起して北條勢を散々に驅け散らしたのである。

信玄は豫定の勝利を得て直ちに郡内に入り、氏康父子は萩野まで出陣したるも先鋒の敗報を聞いて引返した。

翌十一月五日信玄は再び駿相國境に出動して北條氏の九城を陥れて、この戦捷の成果を收め、十二月六日北條新三郎の守つた蒲原城を陥れ、薩陞山の北條勢を追ひ散らし、信玄は駿府に滞在し、藤枝城を開退せしめて、之れに代つて馬場信房を置いた。此の時から藤枝は田中と改稱されたのである。

信玄は元龜元年四月までの中に駿河一圓を鎮定し、信玄最終の活動の目的の一部は實現された。之に對して北條氏の受けた脅威も亦た甚大なるは勿論で、謙信も亦た之を助けて四月及び十月上野に來り厩橋城に入り、信玄は箕輪城に出て之と對陣したが、決戦には至らず、又た八月信玄は韮山に出動し、氏政は三萬八千人を五十備として信玄の二萬三千人の二十一備と三島に對陣したるも、亦た氏政の退散により決戦を見ずに終り、十月三日氏康病死し、十一月には氏政終に弟二人を人質として武田氏に降つたので、武相の方面からの壓迫は全く失せた。

信玄掉尾の活動はこの經過により目出度く序幕の幕を引いた。

三二

上洛を究竟の目的とする信玄の次の活動は遠參濃尾の四州に向けられ、十月初山縣の島田に出て大井川右岸小山邊に亂妨に及んだ事件はその第一歩で、この報を聞いて百數十騎を卒いて出馬した家康に對して喧嘩を仕かけて、日坂邊まで之を追ひ返した。次は十二月上旬秋山伯耆に預けた家康の人質源三郎を、態と油斷を裝ひ雪中に參河へ逃げ歸らせたことで、之を織田、徳川兩家との手切れの口實とした。

公然たる行動の始めは同月秋山伯耆が伊那から濃州上村に出たことで、東參河東美濃衆と戦ひ山家三方（作手、田嶺、長篠）衆を降し、翌元龜二年二月大宮を経て駿河に出で、二十四日大井川を渡つて榛原小笠兩郡の地に入り、高天神城主小笠原與八郎と小せり合をなし、翌日掛川久野の諸城を巡見し、秋葉山を經る信州街道を北行して、その山下の乾（犬居）城に三千の甲州勢を籠め置き、

伊那に馬を寄せ高遠まで歸つた。

三月廿六日信玄は高遠を發して西參河に向ひ、四月十五日足助城及び附屬五城を陥れ、菅沼新八郎は退いて居城野田につづみ、轉じて吉田(豊橋)城を攻めたるも、家康と交戦を見ずして去つた。家康はその報復戦として翌三年閏正月金谷筋から、小笠原はその南から大井川を渡つて河原まで侵入した。

此年秋遠參二國の地形險易を計り、甲信駿三ヶ國上野半ヶ國飛驒越中武藏相模へかけての領分を動員し、越後の後顧の患なき冬季に乗ずれば、總兵數三萬八千人を以つて織田徳川兩氏と決戦し得ることを確定して、作戰の準備を始めた。

信玄は同年十月中旬甲府を發し、秋葉街道により遠州に入り多々羅飯田(森町の南)兩城を攻め落し、久野城巡見の時濱松勢四千餘人出て之と少競合があつた。續いて十一月天龍川の峽谷入口に在る二俣城を攻め、家康八千人を以つて後詰したが、馬場信房に押えられ、天龍川を渡つて引き揚げ共に兩軍の決戦を見ずして終つた。

信玄は此の間に天龍川以東の徳川氏の諸城を陥れ、東參河を攻略せんとして、天龍川を濱名湖北の本山越の女坂街道に沿ひ荊部(きりかへ)に向つた。十二月二十二日味方ヶ原の會戦はこの通過を沮止せんとする濱松勢の出動により偶然に起つた。

此の時武田氏の陣立は甲州流典型ともいふべき、山本信晴の考案の完成した戰鬪隊形であつた。その先手は山縣小山田(兵衛尉)小幡高坂内藤眞田馬場の七隊と之に續く勝頼土屋典厩武田左衛門佐、

穴山跡部望月の七隊より成り、二ノ手は市川小山田大學下曾根長坂諸將の五隊より成り、旗本の右に小山田備中等の四隊、左に原隼人等四隊を並べ、後備は一條逍遙軒仁科海野の四隊で、小荷駄を後尾とし、その左右に淺利衆と甘利衆を備へた。

濱松勢は九隊を一横列に立て、之に織田勢若干も加つたが士氣振はず、家康は自ら旗本を以つて山縣の備を衝き、山縣の手に附けた三方衆が先づ潰えて四町ばかり驅り立てられたので、戰鬭開始の初期には徳川勢に壓迫されて形勢頗る怪しかつた。然るに小荷駄奉行の甘利衆が酒井左衛門備へを側面から衝いて切り崩し、九隊の中八隊まで鎗を合せて奮鬭し、結局悉く敗退したのである。山縣の旗色怪しい時に勝頼先づその側面から出て盛り返し、同く山縣の手にかゝつた酒井の備には甘利衆がかゝつて勝利が甲州勢に歸したのである。

信玄は二十四日陣を刑部に移して越年し、翌天正元年正月七日日本坂を越えて野田城を攻め菅沼定盈支え能はずして城を開いて降つた。然るに此の時信玄の痼疾再發したので、鳳來寺に移つて病を養ひ、吉田城を攻めんとするに當り十一日病革まり十二日夜信州禰羽(根羽)で死んだ。之と共に天文五年から三十八年十九度の大戦を経て築き上げた天下に號令せんとする雄圖は煙の如く消えたのは歴史を讀むものの、一掬の涙なき能はざる所である。

今その參遠兩國出兵の線路を觀るに、飯田を根據地として矢作川の上流根羽に出で、足助川に沿ふて足助に至り岡崎に出る西參への行動と根羽から設樂盆地に越えて鳳來寺を経て豊川溪谷に沿ひ吉田(豊橋)に出る東參への行動とが頗る重要なものであつた。濱松城に據つて東海道を扼する徳

川氏に對しては、この作戰線はその郷土を脅かすに足るも、濱松城に對する作戰には駿河から西進する山縣昌景の支隊と天龍川の東岸に於いて合する爲めには、秋葉街道により天龍川支谷の構造線に沿ふた通路に由るのが便で犬居飯田二俣久野の諸城を占有するの必要があつたのである。

津山盆地の地質概報

竹 山 俊 雄

津山盆地は中國の解析高原の間にある東西に長い矩形の盆地であつて、その地質は從來から可成よく調べられて居り、相當複雑である。筆者は中村横山黒田の諸先生の御指導の下に此の盆地の地質、殊に第三紀層を主として研究した。併し尙ほ野外調査は充分でなく幾多未解決の問題を残して居るが、茲に纏つた丈の結果を概報する。本稿を草するに當つて懇切な御指導を賜つた諸先生に深く感謝する。此の地方の文獻は地球第六卷第四號に載つて居る。その後同誌第十卷第四號に雜報があるのみである。

上、地 質 概 説

古生層は此の地域に廣く分布してゐて、屢々千枚岩に變質した粘板岩を主とし、珪岩、輝綠凝灰岩(大井西村にて石灰岩の薄層を夾む)が夾在する。走向は東西に近く、南方或は北方に傾斜して幾つかの背斜及び向斜を成してゐる。併し盆地内では中生層、第三紀層や火成岩の間に分離して露出する爲め、その層序は未だ詳しく分らない。此の區域では化石は發見されてないが岩質上から從來古生層と考へられて居るのである。